

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



破天荒だった友人の結婚式

初めて北海道の結婚式に参加した時は驚きました。発起人が呼びかけ、会費制ということもあってすごい人数の来場者でにぎわいます。名刺を交換しただけの方のご子息の結婚式の案内が来たこともありません。司会は発起人の一人が受け持ち、私の時も友人が務めてくれたし、私も何回か頼まれたことがあります。

ここしばらく出ていませんが、最近の結婚式は質素な感じかなと想像しています。しかし、ネットでフラッシュモブというサプライズを見ると大変面白く、父親が新郎新婦に内緒でサックスを披露するといった動画もなかなか味わい深いものがあります。様々な式の形があるようです。

若い頃の話です。関西の某市で挙式する友人から案内状が届きました。北海道や東京、新潟などから親しい友人と申し合わせて、前日に集まって一杯飲もうと企画しました。その席に新郎も登場し、驚きの発言が。

「真鍋、明日司会をお願いします」と軽く言います。「ちょっと待って、何も聞かずにいい。誰か同僚に頼め」と固辞したものの強硬です。渋々受けることになりました。さりげなく、来賓のあいさつや

乾杯の発声をする人を式次第に印刷はしたが、本人に直接頼んでいないと言います。目が点になりました。

その場の友人たちで、受付などの担当を割り振り、当日を迎えました。受付横で二人を待ち「突然で恐縮ですが、お願いします」と言つと「聞いてないよ。今日の今日では無理無理」と拒絶されました。当然です。

そこで渾身の一撃です。「私は新郎の友人で、北海道から昨晩着きました。そこで初めて司会を頼まれ、渋々ですが受けました。何とかお願いします」と言つと、沈黙の

後で「それは大変だ。わかりました、やりましょう」と承諾をいただきました。

その後はさすがですね。お二人とも話に含蓄があり、彼のでたらめな性格をチクリと暴露しながらのすてきなあいさつをされました。お二人と乾杯したのは言うまでもありません。全てを終え、後片付けしているスタッフのところに行き、「お陰さまでよい式ができました。ありがとうございます」と言つと、「式場の担当者もこの経緯を知っていて、拍手をくれました。」

そんな破天荒な新郎が、無事定年を迎えました。奥さんが立派なのでしよう、よい家庭を築いたようです。

結婚式がきらびやかでも、地味でも、その後の結婚生活は、うまくいく人もいれば、残念な結末を迎える人もいます。式の大小ではないのですね。